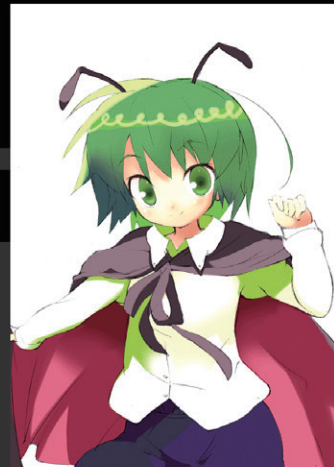
月刊ナイトバグ　小さい秋その他見つけた型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年10月号
芸術はバグハッツだ！
月別テーマ「アート」
読切り作品
SS ：Salka/くろと/草加あおい
漫画：イリイチ/羅外
連載作品
SS ：悠奈
漫画：草加あおい/ぼこ/猫屋敷/キッカ/
クロツク/preudenano/怒羅悪

月刊ナイトバグ　2010年10月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

『たまには妖怪も誘ってみよう』　貴キ

「あなたの能力で虫を操って一緒にいたずらしましょう！」「ひえぇ、私はいいよ…！」
「あいつら今度はリグルにちょっかい出してるー！」

『まだまだ暑い』　草葉

あまりの暑さにずっとスク水で過ごしていたら日焼けの跡が

東方茶湾虫
クロック
最近の虫は
こーゆーのが
はやってるのか…
それにしても
「ブンチャカ」って
なんなんだ？？
ビガッ
ビガッ

だいぶ
涼しくなったねぇ
もう秋が
近いのかなぁ
♪ピザ　モッツァレラ
ピザ　モッツァレラレラ…
ねぇ聞いてる!?
リグルはこの夏
なにしてたの？
はは
寝たり食べたり…
みすちーは？
ずっと永夜抄の
1面ばっか
クリアしてた
ちくしょう
私だよっ!!
あれは
妖怪かしら？
さぁ？
ルナはしってる？
……
私…しってる…

……
どっちも焼いたら…
喰える
マジでっ

!?
何者かの気配がする…
…リグル！
シジュウカラって鳥は一年間に虫を十三万五千匹食べるんだって…
悲しくなるからっ！
バレたら？
大丈夫…早く後ろから炎弾で…
ようし、いくわよ…
トイレそうじ
うっ!?
動けないっ！どうして!?
！
リグル！あのね、さっき…
リグルの周りを囲むように輪ゴムを並べてみたの
なんで!?
あぁ！嗅覚が錯乱していくっ
ずらっ
わたしもう帰るね
えっ!?
あとここにゴキブリホイホイ置いていくから
やめてっ！なんかウズウズしてくるからっ！
知ってる？この森って心霊スポットで…
それはもう殺虫作用が凄まじいとか…
もう泣いていいかな!?
あばよダチ公ー
ヒュエエエ…
ちょっ！ちょっと待って！だ、誰かっっ
こわいこわいっこわいよぉぉっ！
……
さっ
次の日みすちーは泣いて謝ってきました

リグル紅魔を行く2

preludenano

ここから先は
絶対に通しません！

続く！（ただしあくまで願望

リグル
と
チルノ

チルノちゃん！
ああ、リグル

秋になって涼しくなったから チルノちゃん嬉しいでしょ？
う～ん…

チルノちゃん・・・
涼しくなったから みんなあたいにくっついて きてくれなくなっちゃった

私がいつでもぎゅって してあげるよ！
むぎゅっ
ブツブツ…
ほんとみんな勝手だと 思わない？

描いた人
ぼこ

おともさん

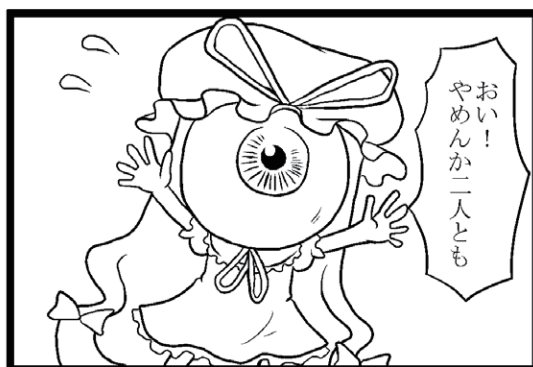
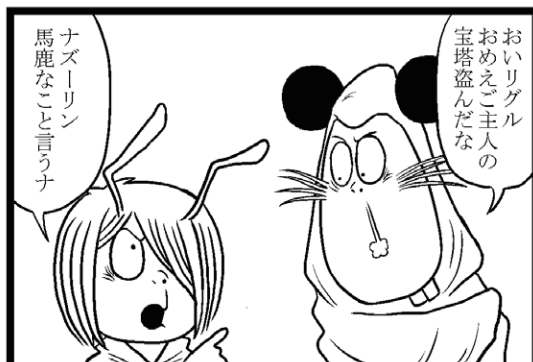
～ニコマ～

描いたひと:
総羅悪

おこさまりさ
と
りぐる
りいち
てく
てく
～♪
ぴこ
ぴこ
ぐいっちょ
!?
ぎゅむむー

おばけにゃ学校も試験もなんにもない

デス・小町

シゲル・ナイトバグ

羅外

箱詰め

著者：くろと

それが手元に届いたのは残暑が厳しい秋の頃合だった。私は郵便物を配達をした天狗に会釈し、新聞紙を押し付けられる前に戸を閉じるのである。

　蝋の封印が捺された封書である。私はペーパーナイフで封書の上部を切り開き、人差し指と中指にて中身を摘まみ出した。綺麗に二つ折りされた手紙が一枚、続く動作で手紙を見開いた。

『招待状』

『本日、日が没する夕焼け頃、紅魔館にてフランドールの誕生日会を催します』

『差出人　Remilia Scarlet（代筆　十六夜咲夜）』

　私は、ふぁぁ。と、欠伸を一つ、簡素な手紙をくしゃりと握りつぶした。それから置時計で時刻を確認すれば長針が四を示しており、夕焼けまでは約二時間。プレゼントを用意するには手間が足りない。かといって適当なプレゼントをすれば命が足りなくなる。

と、私が思索に耽っていれば、玄関を叩くノック音が響いてくる。もう一度、戸を開けた。

戸口で立っていたのは壮絶に白い美少女である。その肌色は美白というより蒼白で、瞳からは生きてる者の精気を感じず、髪質は色素が通っていないと思われるほど真っ白で、唇は死者にも比肩しうる色合いだ。そんな死相と腰に提げた二本の刀、周りを浮遊する生き魂が彼女を特定する材料だった。

「なんのよう?」

　私は若干、困惑していた。しかし、彼女は気に留めず、私を無表情で見遣り、懐に手を忍ばせて、一枚の懐紙を取り出した。一目で私が受け取ったものと同一だと断定できる。

「知り合いに相談したら」

　彼女が開口した。真っ青な顔とは対照的な、深紅の舌先が垣間見える。

「紅魔館の妹姫はお転婆だと聞いて、珍しい昆虫を生け捕りにしようと思ったの」

　事務的な口調と抑揚のない表情で、彼女は不意を突くように右手で抜刀した。

　私は顎を引いた。玄関に飾ってあった花瓶が割れて、花弁と水が散った。それを行動の合図とする。家屋に住まわせている昆虫を一箇所――抜刀していないほうの鞘――に集約させたのである。昆虫は受けた指示通りに彼女の武器を一つ封じる。

「前より判断が速い……」

　私の対応に、彼女の眉根が少し詰る。

「でも関係ないか」

　彼女は鞘の鯉口を突き出し、私の胸部を強く打ったのである。

「かっ……!」

　伝わった衝撃で肺から呼気が漏れ、態勢を崩した。彼女はすかさず刀身を裏返し、峰で頭頂部を叩きつけてきたのである。

　目を覚ますと、そこは暗く、息苦しく、狭いと三拍子揃った空間だった。と、外から歓声と音楽が聞こえてくる。曲目と楽器からプ

リズムリバー三姉妹の演奏であり、パーティ会場に連れて来られたのだと断定した。まるで棺の中で足掻くように私は無造作に手や足を伸ばし、自分の居場所を確認する。おおよそ二メートルの四方形、手触りと培った経験から模造紙の箱に入っているのだと判断できた。気絶したところを箱詰めにでもされたのだろう。私は箱を打ち破ろうと爪で引っ掻いてみた。予想はしていたが、魔術的細工が施されており、脱出は困難を極めている。ならば、と私は大声をあげた。しかし、喧騒に掻き消されたか、声は広がらない。もう一度、叫ぼうとして、私はそれに気が付いた、首筋に巻きつけられたチョーカーのようなそれにだ。いまさら思い至る、箱に魔術的細工を施すぐらいなら、本人に拘束を仕掛けるのは当然だ。やむをえず、私はプレゼントと成る事を覚悟した。だが、その瞬間は中々訪れない。退屈、という言葉が脳裏を掠め、気付いたら外で流れる音楽がルナサ的な曲調になっていた。睡魔が目蓋を閉じさせようと努力している。我慢すればするほど、眠気は体の自由を縛り上げて、私はまたも眠り落ちてしまった。

「!」

　騒々しい雑音が私の鼓膜を振動させた。雑音とは硝子細工が割れた物音で、または音楽隊が曲を止めた無音で、あるいは銀食器が落ちた高音で、もしくは野次馬が奏でる足音である。

　何か、本人には辛く、他人には甘い密な事件が起きている。興は惹かれるも、外には出れず、様子も窺えない。分かるのは音だけで、聴覚を澄ませば外から盛んな話し声が聞こえてくる。

「犯人は誰だろうな?」

「……そうね、私の勘だとアリスが犯人よ」

「そりゃ難しい相談だぜ。アリスはずっと会場に居たんだ。少なくとも私の視線が外れるまでは。凶行はそれ以前に起こってるんだぜ」

「目を離したのはいつ頃?」

「葡萄酒を注文した、ちょうど鬱な曲から躁な曲に変わった頃だったか?」

「ふぅん」

　続いて探偵気取りの声が次なる人物を見つけて話し出した。

「アンタには証拠がある?　できれば犯人を特定する物的証拠か、印象付ける状況証拠が望ましいわね。それらがアリスの証拠だったら褒めてあげる。私を」

「浅ましいほど具体的な要求ね。順繰りに話すけど、先ずは大広間に料理と酒瓶を運んで、三姉妹に演奏を開始させて、妹様に相応しくないプレゼントを仕分けて、葡萄酒の注文に応えて、電気室でブレーカーを上げて、図書館に魔法使いを案内して、侵入を許した役立たずな門番を思い出したからナイフで刺したわね」

「正確な時刻を言いなさいよ」

「時間は操るものよ」

「ごもっとも」

　探偵気取りは足音を打ち鳴らす。

「ちょっとした証拠が欲しいのよ。なんなら捏造したっていいわ」

「嘘はつけない、って知ってるだろ。たしか七時ぐらいに廊下のほうで図書館に向かう影が見えたよ。もう一つ足しとくと、アリスはそのとき会場で人形劇をしていたね」

「酔っぱらいの記憶は頼りになるの?」

「泥酔しなけりゃね」

　先ほどから探偵気取りはアリスを犯人にしたがっているらしく、不利な証拠を探しているように感じる。だが、思惑とは違い、アリスに有利な証拠は揃いつつあり、それを崩すのは無理だろう。と私は考えてみる。

　箱の外では館の者達が集められているようで、映像がない分、会話をラジオで聞いている感覚だった。

「アンタは何か知らない?」

「そうだな」

　探偵気取りに返ってきた声は、半分死んでいるような声だった。

「私はプレゼントを渡して、すぐに正門まで引き返した。元々、参加するつもりはなかったからな。けど門番に引き止められ、結局、八時まで正門に居たわ」

「怪しいヤツが侵入しなかった?」

「いいや。現れたのは七人とも招待状を持った招待客だ。第一、私も居たんだ。侵入なん

て赦さない」
「なら内部犯行で決まり、アリスの線が有力になったわね」
　探偵気取りの声音が上がっている。どこまでもアリスを犯人にしたいらしい。
「そろそろ決め手が欲しいわね」
「なら、私に聞いてみたらどうかしら？」
　それは高飛車な態度を思わせる、少女のソプラノトーンだった。
「いいわ、聞いてあげる。最高級の証言を聞かせてくれる？」
「勿論よ。今日雇った三姉妹が三人で演奏しているとき、一五名が会場に居たわ。でも、長女の独奏になってからは一人減ったわね」
「その一人はアリスかしら？」
「違うわよ。名前なんて知らないもの。後は本人に聞いてみたら？」
　傲慢な微笑を最後に、探偵気取りの足音が再開される。今度は少し、時間が掛かってから、会話が聞こえてくる。
「いまさっき、アンタのアリバイが確認できなくてね。何処に居たの？」
「屋上に。そのアリバイを潰そうと思ってね？」
「あら、何が起こるか分かってた口ぶりね？」
「これだけ集まったんだ。何も起こらないはずがない。そうだろう？」
「それもそうね」
　まったく要領のつかめない会話が終わり、探偵気取りの声もそこで途切れる。
　私には外で何が起こっているのか、まるで分からない。というのも被害者は分からず、犯行現場も分からず、犯行時刻も分からず、凶器も分からず、しかし、証言だけが積み重なっていく。
「よし、あの馬鹿の分もアンタが証言なさい。二人分ね」
「二人分ですか？　私は、八時も半ばを過ぎた頃、酔われた方々に一発芸を振られ、館に落雷を落としました。そのせいで電圧がショートし、館内が停電しましたね。それから総領娘様の証言は、六時過ぎにプレゼントと称し、主役に喧嘩を吹っかけていました。でもこちらの侍従長に軽くあしらわれたようです」
「そんなのどうでもいいわ。それよりもアリスよ、アリス！　アイツに関することが聞きたいのよ！」
「でしたら、アリスにお聞きくださればいいでしょう」
「はン、先に答えを聞くなんてつまらない！」
　探偵気取りはカツカツと足音を床に打ち鳴らした。
「待った？」
「少しね」
　それは若干キーの高いハスキーボイスで、けれど女の子らしいトーンだった。
「何をもらったの？」
「演奏と毒キノコ、賢者の石、貸し出し禁止の図書、人形劇、懐中時計、甘酒、カリスマな微笑み方、太極拳、停電、箱、喧嘩、それとお守り」
「……お守りなんてもらったの？」
「プリーズ」
「ああ、私からか。ほら。……これで証拠が揃ったわね」
　自信満々な声音に対し、私は何一つ分からなかった。だが、見えない相手の声がはっきりと告げている。それとも映像が付いていれば簡単に分かるのだろうか。
　探偵気取りが突如として大声を出した。
「アリス。アンタが犯人よ」
「どうして犯人なのかしら？」
　落ち着いた声が冷静に切り返した。
「消去法。犯行時刻に犯行可能なのは、アンタを含めて三人ぐらい。そのうち二人には動機が思い浮かばない。あったとしてもね」
「どうやって犯行を？」
「勿論、人形を使ってよ。アンタは二体以上の人形を同時期に操れる。簡単ね」
「どのような証拠が？」
「七時頃、犯行現場に向かったのを見たという目撃者が一人。状況証拠からアンタの人形だと断定したわ」
「探偵を気取ってるわね。でも、正解よ。何か感想はあるかしら？」
「イージーな人形劇だったわ。プレゼントだとしてもね」
「底意地の悪い褒め言葉として受け取っておくわ」

え、と私は思った。その理由を考える前に、それは来た。光だ。箱がひび割れ、光が暗闇に差し込んでくる。何者かによって箱が破られたのだ。闇に慣れていた私は反射的に目蓋を瞑ってしまった。
「あ、リグルだー。ねぇ、壊していいの？」
とは眩い目前に押し迫る、ほんのり浮ついた声だった。

（終）

〈作者コメント〉
客観視すると、リグルである意味合いが薄れています。このままでいいのでしょうか？
と、心持を吐露すると気が晴れますね。

無題

著者：草加あおい

上白沢慧音は秋の虫たちが奏でる無秩序な音の重なりの中に立っていた。

この時期になると夜は少し肌寒い。

上着を羽織ってくれば良かったと少し後悔しつつ、月明かりの射さない森の中を、足元に気をつけながらゆっくりと歩いていった。

彼女が何故こんな苦労をしているかといえば。

昼間、寺子屋である生徒に言われたことが原因である。

秋にちなんで宿題として出した「芸術」の提出のため、と指示された場所に向かっているのだ。

「そろそろ…のはずだが…」

細い獣道をかきわけ進んだ先に、視界が開ける。

先ほどまで騒がしかった虫たちがぴたりと鳴きなんだ。

静寂に包まれ、月明かりに照らされキラキラと輝く神秘的な小さな湖がそこにはあった。

約束の場所に到着したはずなのだが、

「ここ…で良いんだよな?」

肝心の生徒が居ない。

先方が「絶対にこの時間に」と指定してきたのだから、手違いがあるとしたらこちらだったろうか?

軽い不安に襲われ、周囲を見渡す。

やはり誰も居ない。

にわかに吹いた風に、木の葉がざわめいた。

その時。

虫が一斉に鳴き始めた。

約束の相手はまだ来ない。

仕方が無いので慧音は虫の音に耳を済ませてみることにした。

スズムシ、コオロギ、クツワムシ…その他色々な声が重なり…

ここで、慧音はあることに気付く。

森に入り始めた時のように不規則な音とは違って…

虫たちは、「1つの楽曲」を奏でているのではないか。

慧音はその心地よい旋律に耳を預ける。

所々テンポやリズムがずれているところもあったが、そこは指揮者の未熟さ故か。

だが、そこもまた味があって慧音は不快には感じなかった。

りーん…

スズムシの儚い声で、楽曲は〆られる。
軽い余韻に浸りながら、慧音は小さなオーケストラとコンダクターに拍手を送った。

「良かったよ、リグル」
「えへへ…ちょっと失敗しちゃったけど…」

湖の対岸から、月のスポットライトを浴び、小さな指揮者が姿を現す。

「いやいや、珍しいものを聞かせてもらえたよ、有難う」
「そ、そうかな…」
「あぁ、里の者に聞かせてあげたいくらいだ」
「やだなぁ…えへへ…」

頭を撫でられ、頬を染める。
触角がピコピコ揺れるのがまた可愛らしい。

「あ、そうだ、先生」
「ん、何だ？」
「虫たちの力を借りるんじゃなくて…私だけの力で、もう1つやりたいことがあるんだ」
「ん、そうか。偉いぞ」

慧音はもうひと撫でして一歩下がる。

「それじゃあ、いきます…！」

湖の上。
妖怪の少女がふわりと浮かび。

「季節外れの…」

月明かりの下。
色とりどりの弾幕が舞い。
湖に反射したそれは、まるで幻想郷に咲いた幻想的な季節外れの花火のような、
美しく、儚く。

（終）

〈作者コメント〉
※コメントなし

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

〈前回のあらすじ〉リグルが人里に着いた時、村人は皆死んでしまっていた。我を失った慧音を止めるため、そこに現れた妹紅と共に慧音を倒す。その後、二人の後方から話かける人物が現れた。

「簡単にだが、治療を済ませた。後はそのままにしてれば大丈夫だ。」
　夜の人里で一軒だけ外に灯りが漏れている家がある。そこにはリグルと妹紅と一緒に一人の女性が座っていた。女性の腕には包帯が巻きつけられていた。
「ありがとうございます。妹紅さん。」
　女性はそう言って頭を下げる。妹紅はそれを見て包帯を元あった所へ片付ける。その様子を黙って見ていたリグルが口を開く。
「あの、傷の手当も出来たことですし、貴女の事教えてもらえますか？」
　リグルがそう言うと女性はリグルの方を向いた。
「はい。お二人は宴会等の機会で目撃したことはあるとはおもいますが、面と向かって話すのは初めてなので自己紹介しておきます。」
　妹紅が包帯を片付けてリグルの横に座ったのを見て、女性は帽子を外し、胸に当てる。
「私、紅魔館の門番を勤めていた、紅美鈴と申します。」
　そう言って美鈴は頭を下げる。
「リグル・ナイトバグです。しがない妖怪やってました。」
「さっきも言ったが、妹紅だ。で、その門番さんがどうして人里に？今の異常事態を知らない訳でもないだろう？」
　美鈴は頭を上げる。そして帽子を膝の上に置いて二人を見る。
「はい。昨夜から幻想郷は何かおかしい……異変にしては規模が大きすぎる事態が起こっています。」
「異変解決の為に巫女が動いたって話も聞こえないしな。で、門番ならこの非常時にこそ館や主を守っているべきなんじゃないのか？」
「……。」
　妹紅がそう言うと、美鈴は下を向いて黙った。
「何か、あったんですか？」
　リグルが心配そうにその様子を伺う。暫くの沈黙の後、美鈴は口を開いた。
「昨夜――

◇

「おかえりなさいませ。お嬢様。」
　美鈴は紅魔館の門前で一人の少女に頭を下げる。
「ただいま。美鈴」
　頭を下げられた少女は美鈴の横を通り抜けながら答える。
「留守番ご苦労様。」

少女の後ろをついて歩いていた従者が美鈴にねぎらいの言葉をかける。二人が去って行ったのを確認して、美鈴は頭を上げる。
「ふぅ、後は妖精に任せて私も寝ようかなぁ……」
美鈴は背伸びをして身体の疲れをほぐす。
「そろそろ日付も変わるなぁ。あーあ、私も宴会行きたかったなぁ……」
ブツブツと文句を言いながら美鈴は、自分と妖精達で構成された門番隊の詰所に帰り、妖精に後を任せて眠りについた。
――数分後
「!?」
美鈴は館の方から聞こえた轟音で眼を覚ました。
「な、何なんですか?一体……っ!」
その時、宴会後にリグルや妹紅達を襲った異常な感覚が美鈴を襲う。
「な、何……これは?気持ち悪い……」
吐き気を必死に抑えながら美鈴はベッドから飛び降りる。
「そ、そうだ。さっきの音を調べなくちゃ……」
なんとか落ち着いて私室の扉を開け、詰所から出る。すると、門の方から走ってくる妖精の姿が見えた。
「あ、ちょうど良かった。今の音は一体何ですか?何が起こって――」
「た、隊長!」
美鈴の質問は息を切らして走る妖精の声で遮られた。
「隊長！お穣様がお呼びです。至急の用件とのこと。それと、い、妹様が……」
「お嬢様が?それに妹様って……何があったの?」
その言葉を聴いて美鈴は血相を変える。お嬢様が門番を至急の用件で呼び出すなんて事は滅多に無い。そして何より妹様という単語、美鈴には嫌な予感しかしなかった。
「つ、伝えましたから。伝え……ましたから」
そう言うと妖精はその場に力無く倒れこむ。美鈴はその時気付いた。妖精の背中に大きな傷があり、そこから血が出ていたことを。
「館で何が……?と、とにかくお嬢様の元へ行かないと。」
妖精に黙祷をして、美鈴は空を飛んでいこうとするが、空を飛ぶことが出来ないことに気付く。
「あ、あれ?なんで……」
美鈴は妖精がわざわざ空を飛ばず、走ってここまでやってきたことに気がつく。
「もう……本当どうなってるの?」
美鈴は館に向かって走りだした。庭を駆け抜けている間、館から爆音が何度も聞こえる度に、美鈴の不安は強まっていった。
普段から身体を鍛えていた為、美鈴はすぐに玄関へ辿り着く事が出来た。美鈴が取っ手に手をかけ玄関の扉を開けると、館の中はボロボロになっていた。
「な、何が……?」
その光景にたじろいでいる美鈴の前に一人の妖精メイドがフラフラと歩いてきた。
「美鈴……さん。お嬢様からの伝言です。『裏口から遠回りして私の部屋へきなさい』です」
そう言うとその妖精は壁にもたれかかって座りこんだ。
「ちょ、ちょっと、大丈夫?」
「大丈夫です……少し、疲れました。」
そう言って妖精は目を瞑った。美鈴は玄関を出て、裏口へとまわりこむ。館は広く、正面から裏口へはかなりの距離があったが、体力に自身のある美鈴はすぐに裏口へと辿り着いた。
裏口へ着いた時、館の上の方から一本の縄が下りているのが見えた。縄がどこから伸びているのか眼で追ってみると、そこは館の主の私室で、その窓から先程の従者が顔を出して外の様子を伺っているのに気がついた。従者が美鈴の姿を見つけると従者は叫んだ。
「美鈴!早くこの縄をつたってこちらに来なさい!」
美鈴は言われた通りに縄を登って主人の部屋へと入る。そこには険しい表情をした従者と、眼を瞑ってただベッドに腰掛ける主人。それと、ひたすら何かの魔法を唱え続けている主人の友人である魔女がいた。
「咲夜さん。一体何が起こっているのですか!?」

咲夜、と呼ばれた従者は黙って美鈴の方を見る。
「美鈴、実は、妹様が地下室を飛び出して、暴れているの。」
「妹様が……？」
「ええ、今日のだいたい日付が変わった頃ね。地下室の扉を壊して妹様が出てきたわ。それから、妹様は近くにいた妖精メイド達を殺しているの……まるで何かの遊びのようにね。」
咲夜は悔しそうに親指の爪を噛んでいる。
「で、でも、妹様が暴れているだけなら、皆の力で何とかすることが出来るんじゃ……」
「力が上手く使えないのよ。私も皆も」
黙っていた館の主、レミリア・スカーレットが口を開く。美鈴と咲夜はレミリアの方を向く。
「咲夜は時間を長い間止めることも出来ず、パチェもろくに魔法を使うことが出来ない……私は運命を変える事も出来なくなっていたわ。」
「そんな……一体どうして？」
「わからないわ。ただ、分かっていることは、誰かが大きな異変を起こした。そして、そのお陰で私達は皆闘争本能に従って周りの人を殺めようとしている。フランは特に本能に素直だから、きっと今の状態なのでしょうね。」
そう言ってレミリアは立ち上がり椅子に座り、机の上にあったお茶を飲む。
「現状はわかりました。でも、どうして私が呼ばれたのでしょうか？」
「貴女だけ運命が見えないのよ。」
「え？」
「今の私には運命を変えることは出来ないけれど、運命を覗き見る事は出来るの。私達三人には希望は無いわ。ここで私達の運命は途切れている。でも、貴女の運命には希望があるみたいよ。その事を伝える為が一つ。」
レミリアはお茶を飲み干す。
「もう一つは、貴女にフラン……妹の事を任せるためよ。」
そう言うとレミリアは立ち上がり、魔女の近くへと歩み寄る。
「パチェ、全部終わった？」
パチェと呼ばれた魔女、パチュリー・ノーレッジは疲れた顔でレミリアに振り返る。
「出来たわよ……。全く、ただでさえ体力が無いのにこんなに労働させて……疲れたわ。」
パチュリーはそう言うとぜぇぜぇと息をしながらその場に座りこんだ。
「お疲れ様、パチェ。美鈴！」
「は、はい。」
美鈴は名前を呼ばれてレミリアの元へと駆け寄る。レミリア目線の先には数本のナイフがあった。
「美鈴、これから先、もしもフランと接触することがあれば、これを使ってフランを止めなさい。さっきパチェが咲夜のナイフに対吸血鬼用の魔法を封じ込めておいたわ。」
美鈴はナイフを手に取ってみる。ナイフはとても軽く、持っているかも分からない位だ。
「美鈴、貴女に最後の命令を下します。」
レミリアは厳しい表情をして美鈴を見つめる。
「貴女は今からこの館から出て、この趣味の悪い異変を解決しなさい。その際、もしもフランと接触するような事があれば、アノ子を倒し、楽にしなさい。いいわね？」
「はい。紅美鈴、命にかえてもその使命、全うします。」
「よろしい。そうとわかったらすぐにこの館から出なさい。もうフランはそこまで来ている。」
そう言うと同時に部屋のドアが思いっきり叩かれた。
「お姉様ー？どうしたのー？ねぇ、あけてよ……」
「運命通りだわ。美鈴、後は任せたわよ。」
レミリアは扉の方を睨みつける。
「美鈴！」
咲夜に呼ばれて振り返った美鈴は、咲夜に軽く口付けされる。
「美鈴、お嬢様は貴女だけがここで死なない運命だと言ったわ。紅魔館の運命は任せたわよ。」
そう言うと咲夜は美鈴を背にレミリアの元へと歩み寄った。その肩は若干震えていた。
「咲夜さん……」

美鈴は踵を返して窓から降りる。一気に色々な事が起こりすぎて頭の中で整理がつかないが、とにかく今は逃げようという脳の指示で身体を動かす。
「パチェ、一応足止めよろしく。」
「わ、わかってるわよ……」
レミリアに言われてパチュリーは呪文を唱える。すると、館の周りだけに雨雲が現れ、雨が降り始めた。
「咲夜、お茶おいしかったわ。もう貴女の淹れるお茶が飲めないと思うと寂しいわ。」
「お嬢様……」
ドアが衝撃に耐え切れず、大きな穴が開く。そこから血まみれの無邪気な子どもが部屋に入ってきた。
「おねーさま。どうしてこんなところに閉じこもってるの?あそぼうよ。」
「……そうね、遊んであげるわ。」
お互い笑顔に話しているが、そこからあふれ出る殺気に咲夜はたじろいでいた。
そして、二人の吸血鬼が衝突した。

◇

美鈴はひたすら走った。レミリアからの命令を遂行する為に、異変解決の専門家である博霊の巫女が居る神社を目指して走った。紅魔館から神社へは空を飛べばそう遠い距離ではないが、空を飛ぶことが出来ない今、紅魔館の眼前にある湖をわざわざ迂回しなければならない。美鈴がいくら体力自慢と言えど、大きな湖はなかなか回りこめない。幸い、敵対しそうな妖精達に会うことはなかった。
数分後、美鈴は無事に神社へとたどり着く事が出来たが
(人の気配がしない……?)
人どころか、何時も神社で見かける鬼の気配も感じない。美鈴は神社の境内にある巫女の住まいの戸を叩いてみる。
「……反応無し。巫女が昨夜の宴会の後始末を一人でするのが嫌になって家出でもしたのかしら……」
チラリと後ろを振り返ってみると、そこには宴会の後で散らかった酒瓶やおつまみの皿が放置されたままだった。
「相変わらず酷い状態……」
その時、遠くにある紅魔館の空で雨が止んでいる事に気がついた。
「パチュリー様……皆……」
美鈴が館から出た後に振った雨はパチュリーが発生させたものだった。その雨が止んでいるということはその術式を唱えた人物は
――
美鈴は憤りを覚えた。こんな理不尽な事があってたまるか。昨日までのんびり暮らしていたはずなのに、たった一夜、いや、一時間にも満たない時間でわけのわからないままその平穏を壊されてしまったのだ。
美鈴は誓った。お嬢様の最後の命令を必ず遂行し、異変の主犯をぐーで殴る事。そして、可能であれば全てを元通りにすること。
「そうと決まったら早速行動!手始めに知識人の居る人里にでも……」
と、意気込んだものの、昨夜の夜勤で疲労もたまっていた美鈴は眠くて仕方が無い。
「その前に、休憩かなぁ。疲れてたら何も出来ないし……ちょうど良い寝床も目の前にありますしね」
そう言って美鈴は、主の居ない神社の住まいに勝手に上がりこみ、仮眠を取った。

◇

仮眠を取り、多少の疲れが癒えた美鈴は行動に移った。まずは情報の整理、その為に知識があり、比較的友好的な存在である知識人、上白沢慧音に会う為に人里を目指し、神社を後にした。人里に妖怪が入るのは気が引けるが、非常事態の為仕方が無いだろうと自分に言い聞かせ、美鈴は足を進めた。
「それにしても、空を飛べない事がこんなにも不便だったなんて……」
ブツブツと文句を漏らしながら人里へと向かう美鈴。神社から人里まで残り半分という距離にさしかかった時、美鈴は足を止めた。
「この気……まさか、妹様!?」
美鈴は気を操る程度の能力を持っていた。今回の異変でその力は弱まっているが、空気中に流れる気を感じる事は出来た。人はそれぞれ内なるエネルギーとして気を持ってい

る。その気を操る事の出来る彼女は、人の気配を感じ取りやすい。美鈴は森の中で館の方の道から人里へ向かうフランドールの気配の流れを感じ取ったのだ。
「妹様が館を出て既に人里へ……？」
　そうなると危険だ。館で見たフランドールの状態からして、人里では何を起こすかわからない。美鈴はフランドールの気配を追って駆け出した。

◇

「と、言うわけなんですが……」
　美鈴はこれまでの経緯を二人に語った。二人は黙ってそれを聞いていた。
「人里に入った時、人の気配が一切ありませんでした。その状況からして、妹様がここに来て、暴れたのは確実でしょう……。」
　そう言われてリグルは人里の中心にあった骨の山を思い出した。あれは全部人里に住んでいた人の物で、それは全て一人の少女によって行われた惨劇だった、という事だ。
「お前は私達を襲わないのか？昨夜お前も感じただろう？あの違和感に……。」
　妹紅にそう言われて美鈴は少し考える。
「んー……そういう命令は受けてませんから。それに貴女達だって私を襲わないでしょう？」
　笑顔で返す美鈴。
「ところで、その怪我はどうして出来たんですか？今までの話では出ませんでしたが……」
　リグルが軽く手を上げて質問をする。美鈴は自分に巻かれた包帯を見て話す。
「ああ、これですか？いや、お恥ずかしい話ですが、妹様の気配を追うのに夢中で、木の根っこにひっかかってしまいまして……」
「へ……？」
「いやぁ、森の中なんて久しく走ってないですから、思いっきりこけてしまいまして、顔からステーンといてしまいましてね。」
　照れながら話す美鈴に対して二人は冷ややかな眼で見る。それに気付いた美鈴は恥ずかしくなって話題を変えようとする。
「えっと……ところで、慧音さんは無事だったんでしょうか？」
　美鈴の質問に妹紅とリグルは顔を見合わせた。
「実はな……」

「そうだったんですか……」
　妹紅とリグルも美鈴のこれまでの経緯を語った。
「慧音が消える間際に『紅い悪魔』と言っていた。恐らくそのフランドールとか言うヤツが人里を襲ったのは間違いないだろう。」
「妹様……」
「落ち込んでいても仕方がない。慧音が消えてしまった今、新たに情報を探さないと。このままじゃわからないことが多すぎる。」
　そう言って妹紅は立ち上がる。
「そう……ですよね。異変を解決するには情報が――」
　美鈴が全てを言い終わる前に固まる。リグルが二人を見ると、美鈴と妹紅が表情を強張らせていた。
「え？ど、どうしたの二人とも？」
　二人はその問いに答えない。二人とも同じ方向をただ見つめている。
「な、何だこの殺気は……？」
「間違いありません。これは妹様の気配です。」
「え、あの、その……」
　どうしたのかわからなくオロオロしているリグルを無視し、二人は話す。
「これがそのフランドールのプレッシャーか……まともに戦って勝てる気がしねぇな。」
「え、ええ……とりあえず、今は情報を集める事を優先したいです。ここは逃げましょう。」
「あのー……もしもし？」
「リグル。」
「は、はいっ！？」
　いきなり名前を呼ばれてリグルは返事の声が裏返る。
「何変な声出してるんだ……。聞いていただろ。フランドールとか言う吸血鬼がこの辺りをうろついてやがる。見つからないように逃げ出すぞ。」
　真剣な顔をして話す妹紅にリグルはただ頷

くことしか出来なかった。その間美鈴は外の様子を伺っていた。
「気配からしてもうすぐこの辺りに来ます。その前に一旦人里から離れましょう」
「よし、行くぞ。」
　妹紅は音を立てないように民家の戸を開け、外へ出る。それに続いて二人も外へ出る。
　外へ出るとその気配をリグルも感じることが出来た。空気から伝わってくるそのプレッシャーにリグルは震え、足がすくんでしまった。
「おい、リグル!何してる!早く来い。」
　妹紅が小さな声で言うも、リグルの足は動かない。リグルは今までこんな恐ろしい気配にあったことがない。自分の本能が逃げろと訴えかけるが、身体が言うことを聞いてはくれない。
「リグル!」
　妹紅の口調に焦りが見えた。
　わかっている。わかっているのに身体が動かない。わかっているからこそ身体が言う事を聞いてくれない。その間にも気配はどんどん近寄ってくる。
「リグルさん。私の手に掴まって!」
　美鈴が手を差し伸べる。リグルはそれに掴まる。
　暖かい。張り詰めていた空気から解放される。そんな感覚をリグルは覚えた。すると、だんだんリグルの足から震えがとまっていった。
「あ、ありがとう。」
　リグルは歩く事が出来るようになったが、時既に遅く
「だぁれかいるの?」
　その声が聞こえたと同時にリグルの後ろにあった民家が一つ轟音を立てて壊れた。
「!?」
「チッ!」
　崩れた衝撃で砂埃が舞った。そこには一人の少女のシルエットがあった。
「お前達っ!走って逃げろっ!」
　妹紅は砂埃の前に立つ。
「妹紅さんっ!?」
　リグルが振り返る。
「私がここで時間を稼ぐ、生きていたらまた会おう!」
　妹紅は背中で答える。
「妹紅さん!妹様はこの私が……」
「馬鹿っ!お前はコイツの始末よりも異変の解決が優先だろっ!ここで死んじまったら命令を守れねぇぞ!とにかく今は逃げるんだ!私も可能なら後で逃げる!」
「美鈴さん!行こう!」
　リグルは美鈴の手を引っ張ってその場を離れる。
「さぁて、遊んでやるよ。お穣ちゃん」
　そう言う妹紅の額に冷や汗が垂れた。
「遊んでくれるの?皆みたいに簡単に壊れないでよね」

◇

「ハァハァハァ……」
　息を切らして必死に走るリグル達。走り続けて何とか人里の出口までたどり着いた。
「ここからは二手に別れて逃げましょう。被害は最小に抑えたいですから。」
　美鈴の提案にリグルは頷く。
「では、生きてまた会いましょう。」
　美鈴はそう言って走りだした。リグルは美鈴とは反対側に向かって走り続けた。
「ハァ……ハァ……」
　リグルはどれくらい走ったのか、何処に向かって走っていたのかわからなくなっていた。とにかくあの恐ろしいモノから逃げたい。その一心で走っていた。
「ハァ……ハァ……」
　横に誰もいない。また独りになってしまったと思うとリグルはとても辛くなり、疲れてしまった。近くに人がいる喜び、一緒に話しが出来る楽しさ、そういう事が今は一切無い。ほとんどが敵だと思わなければやられてしまう。今の幻想郷はそんなモノなのだ。妹紅や美鈴のような協力的な人も、どれだけいるのかわからない。そう思うとリグルは寂しくなった。
「チルノ……ルーミア……」
　私達の大切な仲間達と馬鹿な事をして笑っていた日がとても遠く感じられた。
「ああ……なんだか疲れちゃった……」

リグルは近くにあった木の根元に座りこむ。そして瞼を閉じ、深い眠りについた。
「おい、ココだ!妖怪が倒れてるぞっ!」
　眠っているリグルの前に一人の少女が立っていた。その少女はリグルを見かけると振り返って誰かに声をかけていた。
「どうやら酷く疲労しているようだ。家に連れ帰って休ませよう。」
　その声を聞いて走って来た人物に少女は言う。
「そうね……明日の朝にでも眼を覚ましたら色々尋問しようかしら。」
「ああ、というわけで、足持ってくれ。」
　眠っているリグルは二人に担がれて森の奥へと消えて行った。

◆

　人里離れた丘にある花畑、そこに三人の人影が立っていた。一人は自身の身の丈程ある大鎌を構え、一人は夜なのに日傘を手にし、一人はその横でただ立っていた。
「今日もお仕事をサボってこんな所にいるのかしら?」
　日傘を持った少女が鎌を持った少女に向かって話しかける。
「あいにく、今のあたいの仕事はいつもとは違ってね。今仕事の真っ最中だよ。」
　鎌を日傘の少女に向かって突きつける。
「それは貴女の意志かしら?それとも、貴女の主の命令かしら?」
「後者。この異変を解決することがお望みらしい。だから、危険人物であるあんたには死んでもらうよ。」
　鎌を構え直し、振りかぶりながら突進する。
「あら、怖いわね。」
　日傘を持った少女は日傘をたたみ、それで鎌の攻撃を受ける。
「随分と余裕だなぁ。フラワーマスター。」
　ギリと奥歯を噛み締めながら鎌を持った少女は言う。
「余裕よ。貴女の攻撃なんて、ね。それに、貴女はもう動けない。」
「何っ!?」
　鎌の少女は驚き、後ろに退こうとしたが、足が言う事を聞かない。
「な、何が……?」
「距離もろくに計る事が出来なくなった死神なんて、ただの少女ね。」
　ゆっくりと日傘の少女が歩み寄る。その横で笑みを浮かべる少女が言う。
「能力は落ちちゃったけど、簡単な毒なら私の付近に出すことが出来るのよ。例えば、足の神経を狂わす毒とかね。」
「そういうことよ。死神さん。」
　鎌の少女の前に立つ日傘の少女は笑みを浮かべて日傘を突きつける。
「く、くそっ。油断した……」
「後悔はあの世でしなさいな。あ、でも、死神は既に彼岸の生物だったわね。彼岸の生物が死んじゃったら何処に行くのかしらね。」
　そういい終わると日傘の先端から白い光が発生し、鎌の少女を包みこんだ。光が収まった時には鎌の少女は既に息絶えていた。
「ふむ。至近距離で一人くらいは倒せる力は残っているみたいね。」
　日傘をポンポンと叩きながら少女は笑みを浮かべる。鎌の少女は身体が発光し、二つの白い塊となり、日傘の少女へと吸い込まれていった。
「ああ、暖かい。この快感は癖になりそうね。」
　ゾクゾクと身体を震わせながら笑う。
「ふふん。私達のコンビって最強じゃない?このまま幻想郷の人間共を制圧して、人形を解放させてやるんだからっ!」
　日傘の少女の横で嬉しそうに語る少女。その様子を見た日傘の少女は冷たく言い放つ。
「あら。何を言ってるのかしら?貴女の役目はもうお終いよ。」
「え……?」
　あまりに冷たく言われて少女は日傘の少女の顔を見て凍りつく。その眼には殺意しか宿っていなかった。次の瞬間、少女は日傘の少女に首を掴まれ、宙に浮いていた。
「ぐっ……あっ……」
「私は今回の異変の特徴にすぐ気付いたわ。だから貴女を吸収して、私はもっと力を得る。そして誰にも邪魔されない私の幸せを作

るのよ。」
　少女の首を締める強さが強まる。
「う、裏切り者……」
「裏切り者？　酷い言い方ねぇ。私は協力するとは言ったけど、仲間になるなんて一度も言った覚えもないわよ。」
　少女はジタバタ暴れるが、日傘の少女は力を緩めない。少女は口をパクパクさせて擦れるような声をだす。
「あ……毒……を……」
「毒で私を倒そうとしても無駄よ。さっきの死神を倒す作戦を作った時に貴女が私に毒の被害が出ないように抗体をくれたじゃない。」
　ニッコリと笑いながら首を絞める力を緩めない。
「あがががが……」
　既に少女は自分の意志で言葉を発生させることも出来ない。
「おやすみなさい。良い夢を。あ、向こうで死神によろしくね」
　そう言って力を強める。ゴリッっと鈍い音がして、少女がぐったりと動かなくなる。それを確認した日傘の少女は、人形のようになった少女を投げ捨てる。
「所詮人形は人形ね。ろくな遊び相手にもならなかったわ。」
　投げ捨てられた少女の身体が光に包まれて球体になり、日傘の少女に吸い寄せられる。
「ああ、快感だわ……早くアノ子にも会いたいわ……」
　人里離れた丘の上で一人の少女が狂ったような笑い声をあげていた。

（つづく）

〈作者コメント〉
　紅魔館ズ『私達回想シーンだけで出番終わりなの？』多分……

東方郵便娘番外編

～ありがとう、月刊ナイトバグ

著者：SaIka

※今回の「東方郵便娘」は、本来の郵便娘の設定に加え、「幻想郷に月刊ナイトバグがあったら」的な設定が加わっております。ご了承下さい。

授業がない日曜日の人里の寺子屋。集まるは妖怪や妖精たち。円を作って座り何やら楽しそうに談笑する彼女たちの前には、便箋とペンが置いてある。

「やー、いい感じに出来たよ」

満足げに便箋を広げて笑うのは、化け傘妖怪の多々良小傘。隣で出来の早さに驚いているのは、化け猫の橙。つい最近手紙を通じて仲良くなった小傘は、今ではよく遊び仲間として一緒にいるようになった。

「できたー！」

　今度はその向かい側から、元気な声と共に氷の妖精チルノが立ち上がった。便箋には文字ではなく、微笑ましささえ浮かぶヘタクソな絵が描かれていた。文章が書けないので絵で伝えようという算段らしい。さすがチルノだ。

そしてチルノの横では、大妖精が自分のを後回しにミスティアの考えた文章を書いてあげている。その夜雀、ミスティア・ローレライは書こうと思う文章を若干歌っているような感じで大妖精に伝えている。間違って鳥目にしなければ良いが。

「ミスティアも字を書く勉強くらいしたほうがいいと思うね。よく今まで仕事ができたもんだ」

　と、小馬鹿にするのは因幡てゐ。てゐの便箋には何やら励ましの文章と、永遠亭の薬の宣伝と、詐欺臭のする文句が書かれている。

「ほら、ミスティアものんびり歌わないでちゃんと考えてあげないと。大ちゃんが困ってるでしょ？」

「そーなのかー」

ミスティアに呆れがちなツッコミを入れているのは、郵便屋で御馴染みの蟲妖怪、リグル・ナイトバグ。

そしてリグルの隣には宵闇の妖怪ルーミア。ちなみにルーミアの便箋はどうやってやったのか、完全に真っ黒に染まっている。

彼女たちは今、慧音に教わった手紙の書き方を参考に、ファンレターを書いている。小傘は既にファンレターを書いた経験があるので大体要領は得ていたようだ。

「宛先はこれね。えーっと……」

　本文を書き終えた小傘が、ある雑誌を手に取る。表紙には、誰が描いたのか、可愛らしいリグルのイラストが。そしてその上には「月刊NIGHTBUG」というロゴが入っていた。

　郵便サービスで一躍有名人となったリグルの、多分ファンなのだろう。なんと今、リグルを題材とした月刊誌が発行されているの

だ。
　編集者も記者も皆リグルのファンらしく、とにかく雑誌の内容も尽きる事ないのか、リグルだらけ。
　それでも内容の豊富さや雑誌を手がける者たちの創意工夫があって、割と色々な人妖にウケがいいのだ。現にリグルの友人たちも面白がって毎月読んでいるくらいだ——といっても、毎月買うお金を持たない彼女たちは古道具屋の香霖堂の店主が読んだ後に回し読みになるのだが。
　とにかくそんな雑誌だが、ある時慧音の提案で、リグルが編集者にお礼の手紙を書くことになった。そしてそれを聞いた友人たちが一緒にファンレターを出したいと言い出して、今に至る。
「月刊ナイトバグ編集部、と。できたー！」
　雑誌の奥付に書いてある住所を封筒に転記した小傘は、一番乗りに手紙を仕上げた。続いててゐが本文を仕上げ、封筒と雑誌を自分の手元に持ってくる。
「あれ、『ざっし』ってどう書くっけ……慧音せんせーい！」
「なんだ、それなら簡単だぞ……」
　少女たちは実に楽しそうに、「月刊NIGHTBUG」へのファンレターを書いている。

＊

　朝から始めたファンレター大作戦は、正午で一旦中断となった。そこはかとなく漂う匂いに、橙が敏感に反応する。
「くんくん……あぅ、お腹空いた……」
「あたいもー……」
　途端、チルノのお腹からぐぅ、と音が鳴る。
「ちょうどそんな頃だと思ってお昼ごはんを持ってきたよ。皆頑張ってる？」
　そこへ、ケースを抱えた妹紅がやってくる。隣には同じくケースを抱えた永遠亭の薬売り、鈴仙の姿も。
「わぁ！」
　皆一斉に、飛びつくように二人へと駆け寄る。見かねた慧音が苦笑しながら「落ち着け、昼食は逃げやしないぞ」と呼びかけた。
「ほら、先にインクまみれの手を洗いなさい。ルーミア、その手でおにぎりを触ると真っ黒おにぎりになるよ」
　ケースを開いて出てきたおにぎりを我先に取らんとする子供たちに、妹紅がぴしゃり。確かに皆慣れないペンの扱いに苦戦したのか手があちこち汚れており、しかも妹紅が指摘した通り、便箋を真っ黒に塗ったくったルーミアの手は真っ黒だった。
「手洗い場ならそっちの廊下に出て奥のほうに向かえばあるぞ、先生が見て合格だったらおにぎりを食べていいぞ」
「はーい」
　どたどたと廊下を走りぬける足音を聞きながら、残った三人が苦笑する。
「お休みの日にまで先生ですか。大変ですね」
「なに、私にとって教職は生きがいの一つさ。生きがいに平日も休日もあるものか。それにお前だって助手として普段よく働くのに、こんな雑用にまで出向いているじゃないか」
　上手いこと返された鈴仙は「はは、それもそうですね」と頷いた。
　ちょうどそこに、一番乗りでチルノが戻ってくる。慧音の前に両手を突き出したが、手の甲に黒い模様がまだ残っていた。
「ちゃんと手の甲まで洗いなさい、手の甲ってのはここのことだ。やり直し！」
「えー！　折角一番乗りだったのに！」
　ブーイングをたれながら、チルノは手洗い場へと引き返した。
　それから数分。全員が合格をもらい、皆の手におにぎりが行き渡る。
鈴仙の持っていたケースに入っていたおかずも出され、
「いただきまーす！」
　元気な声が日曜の教室に響いた。

＊

午後の第二ラウンドは、ミスティアの手伝いを大妖精に代わって小傘が担い、出遅れながらも大妖精が自分のファンレターに取り掛かった。食後の眠気と教室に差し込む適度な日差しで眠気に誘惑される者も出始めたが、その度に慧音の頭突きが炸裂するもので、一発で目が覚めた後はたんこぶをもらいながら作業に取り掛かっていた。

　橙、リグル、ミスティアと、次々とファンレターを書き上げる。ルーミアもきちんとした手紙を書くと、真っ黒な便箋（慧音が窓際でインクを乾かしてくれた）と一緒に慧音に提出した。チルノも便箋数枚に沢山絵を描きあげる。ぐしゃぐしゃに畳もうとしたため、慌てて妹紅が折りなおしたりもした。最後に大妖精も、急いではいたがちゃんと文章を書いて、これで全員が完成である。

　慧音は提出された便箋と封筒を見て、内容が大丈夫か（チルノやルーミアの便箋のように審査不可能なものもあるが）、封筒の住所が間違って居ないかチェックを入れる。

「ふむ……」

　慧音は個性的な手紙の数々に、彼女たちらしいな、と笑みをこぼす。

『私をモデルに雑誌を出してくれる人がいてとってもうれしいです！　これからもがんばります！　よろしくお願いします　リグル』

「月刊 NIGHTBUG」のモデルとなり、また今回のファンレターを届ける役目も持つ、リグル。素直な言葉で感謝の心が綴られている。

『がんばれ！　あたい』

沢山の絵の最後に、ヘタクソな字で励ましの一言を入れているチルノ。

『毎月読ませて頂いてます。お体には気をつけて、これからも楽しい雑誌を出し続けて下さい！　応援してます　橙』

　流石あの八雲藍の式だけあり、丁寧に書かれている、橙。

『もし多忙で疲労が溜まった時は永遠亭に相談して下さい！　仕事の疲れも忘れられる薬を今なら安くお譲りします！』

　ちゃっかり宣伝に利用している、てゐ。

『おもしろかった。また読みたいな　ルーミア』

　真っ黒な便箋と一緒にマイペースな言葉を贈る、ルーミア。

『いつか夜雀特集もやって下さい！　楽しみにしてます！　ミスティア』

　なんか違う気もするが可愛い、ミスティア。

『友達のことが書かれていて照れくさいけど、でもその分すごく読んでいて面白いです。ありがとうございます　大妖精』

　はにかむ姿が目に浮かぶようないじらしい文章の大妖精。

『こんなに素敵な雑誌を読んでいたら、リグルと友達になれたことを自慢できる気がします！　小傘』

　ファンレターがきっかけでリグルと知り合い、多くの友人を得た小傘。

　慧音はところどころの訂正を入れて、全員の手紙にＯＫを出した。

　返却された便箋を封筒に入れて、きっちり糊付けをする。

　糊が乾くまで、持ってきた「月刊 NIGHTBUG」を読みながら談笑して時間をつぶす。リグルは照れくさいやら恥ずかしいやら、赤面しっ放しであった。

　湿った感触が消え、糊が乾いた封筒をまとめてリグルが受け取る。

「それじゃ、『月刊 NIGHTBUG』編集部宛て郵送物八通、確かに受け取りました！」

　お決まりの文句をつけ、リグルは帽子と腕章を装備して教室を飛び出す。

＊

人里の一角。一見普通の民家と変わらない家だが、住所はここで間違いない。
　コンコン。リグルは扉をノックする。

「こんにちは、蟲の郵便サービスのリグル・ナイトバグです！『月刊NIGHTBUG』編集部の皆様にサプライズプレゼントお届けに参りましたー！」

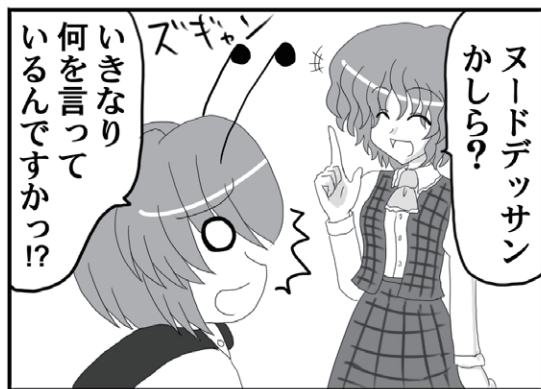
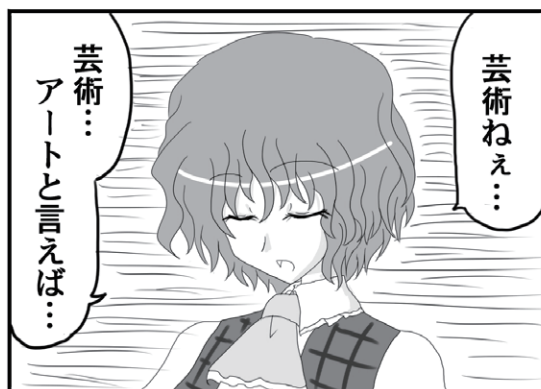
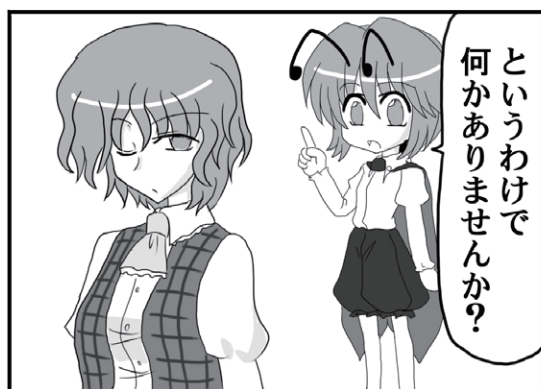
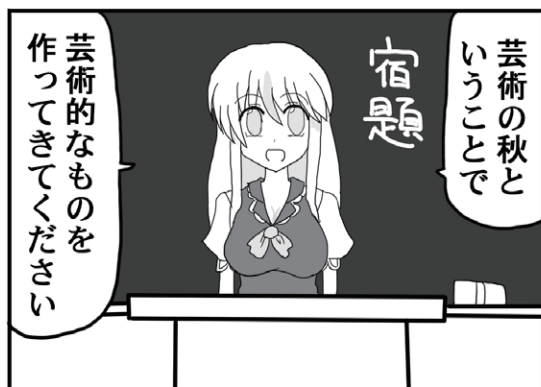
《番外編　終わり》

【後書き】
　乙女リグル企画は皆様もう見られました？ピクシブやニコニコ動画、さらにイベントでもアンソロ発行されるので、良かったら見られて下さいね。（主催でもないのに宣伝乙）
　というかその乙女リグル合同の原稿で時間を費やして、今回突貫原稿で月バグに投稿する羽目になっちゃったのですが。もっと時間は前倒しに使わなければ（毎回の反省点）
　もうホント、この程度なら出さなくてもよくねって感じですが……所要時間なんとたったの一時間半。でもどうしても今月出したかった、だって今回で自分が投稿初めて一周年だから（初投稿も郵便娘でしたしね）。自分以外にはどうでもいい理由で！
　折角の一周年なので、「月バグに感謝！」な感じの番外編にしてみました。うん、それだけ。でもこういうゆるい日常は書いてて楽しいです。見るのはなんか退屈ですけど。
　最後に。
　第六回東方紅楼夢、五号館のか‐〇九にてサークル参加致します。もちろんリグルメイン。間に合えばこれまでのシリーズに書き下ろしを加えた「東方郵便娘」を本にして出そうと思ってます。
　更に今回サークル合同参加させて頂いた方が主催の乙女リグル合同をこのスペースで出すので、良かったら参加される皆様、お立ち寄り下さいませ。
　加えて、大⑨州東方祭3にもサークル参加いたします。こちらは次号で告知になるかな？
　というわけで宣伝失礼しました！

10月号テーマ

『アート』

『無限階段』　蛍光流動

「咲夜がお茶でもどうかって」「まだ次がありますので」
― エッシャーのリトグラフ『上昇と下降』より

Wriggle
Nightbug

困った時の幽香さん

楽屋ウラ的なにか番外編

描いた人 草加あおい

雲山にしようかとも迷ったが

雲にマスパしても、という結論。

さあ

お話を聞きましょうか

依頼人さん？
レミリア探偵局
キッカ

何ですかこの雰囲気
仕様よ

なるほど、永遠亭の博物館に泥棒から予告状が・・・

ところで、何であなたが来たのかしら？
あはは…
手伝ってるうちに成り行きで……

そ、いいわパチェ
ええ、検索をはじめましょう

いい、小悪魔？キーワードは、
「博物館」
「泥棒」

んー、しぼりきれないわね
ぜぇ
ぜぇ

何か他にヒントは無い？
え？うーん…

そうだなぁ…「あのネズミめ」って言ってたような…
！

それだ、パチエ！
ええ 小悪魔、キーワード追加

「ネズミ」

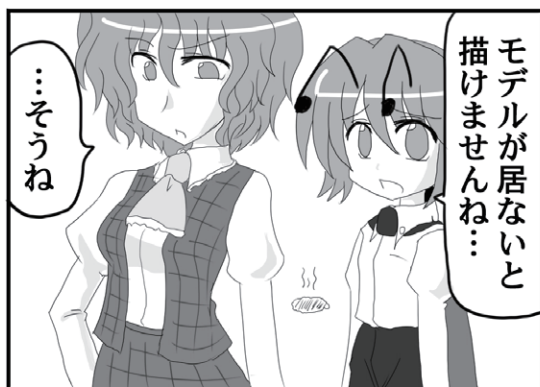
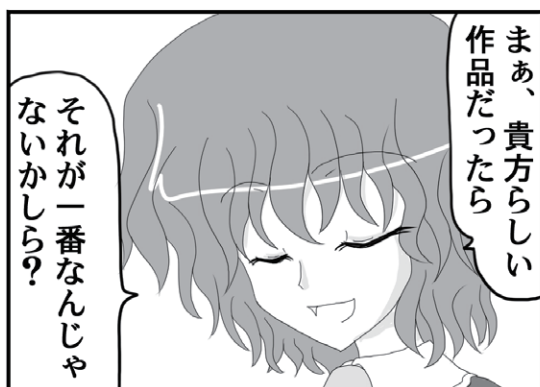
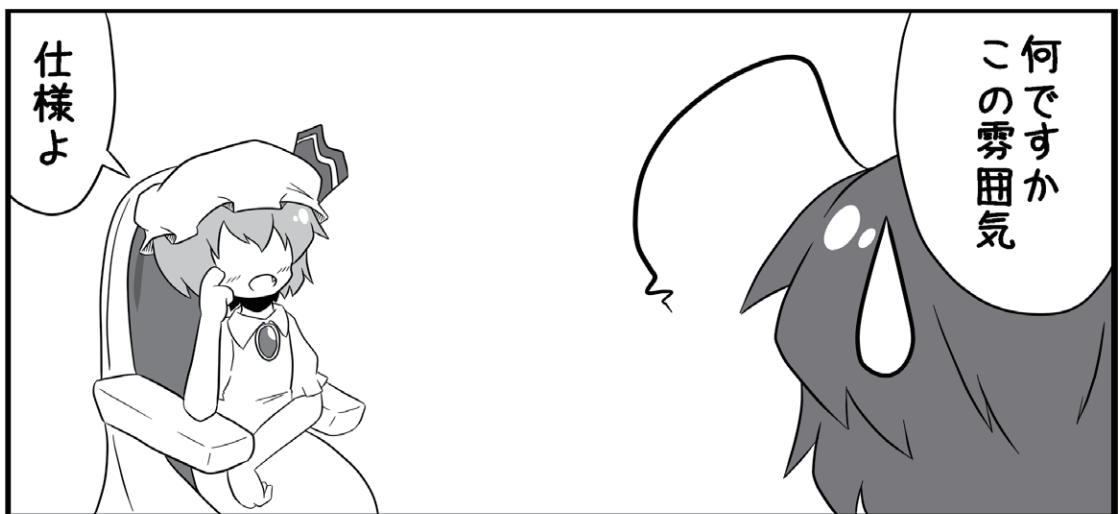
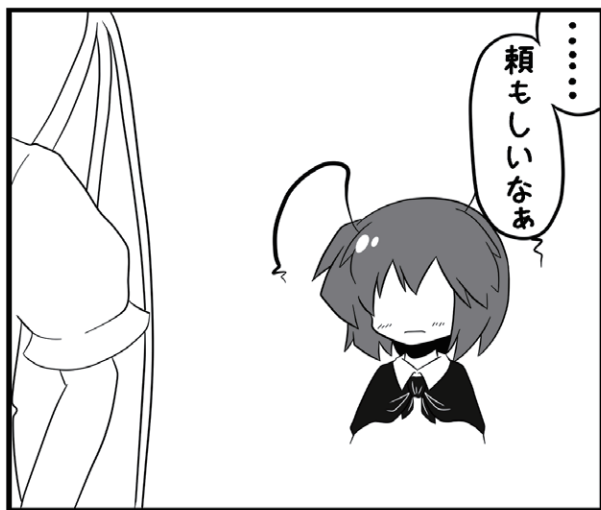
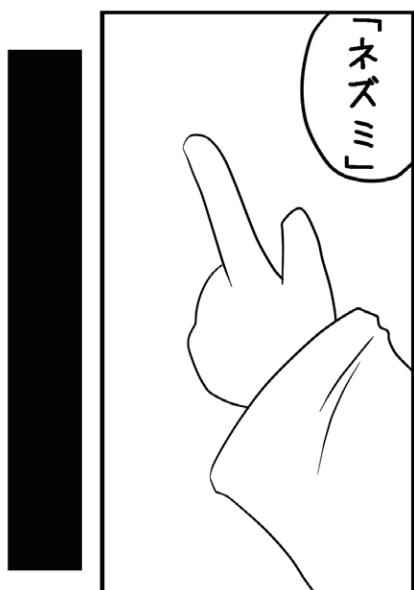
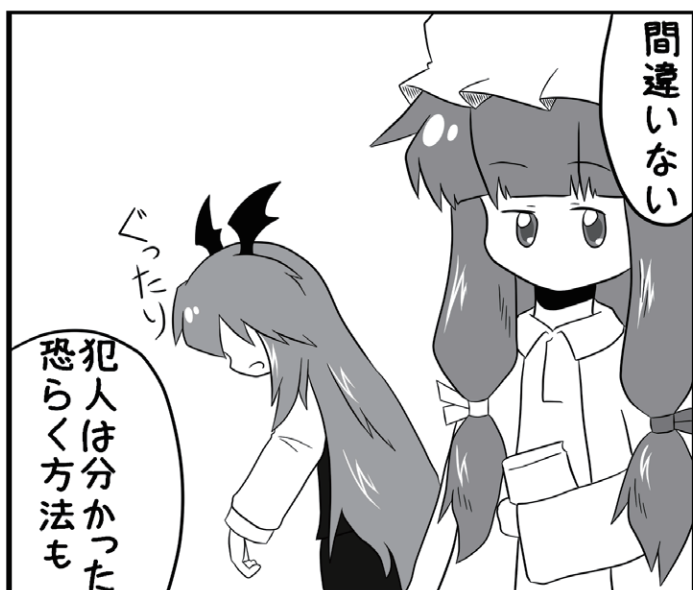
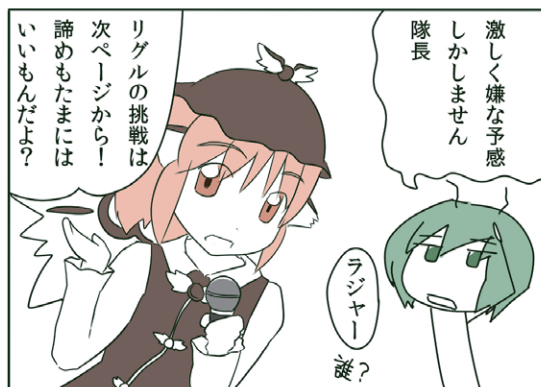
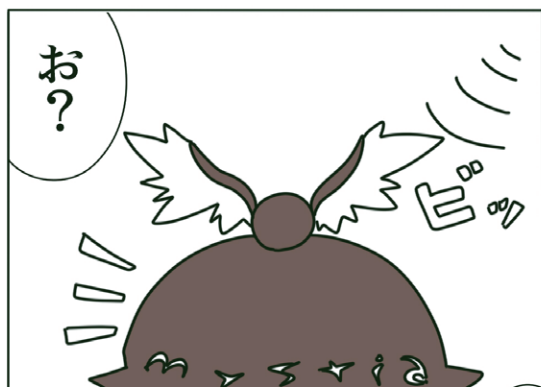
間違いない
ぐったり
犯人は分かった恐らく方法も

OK
行きましょうか

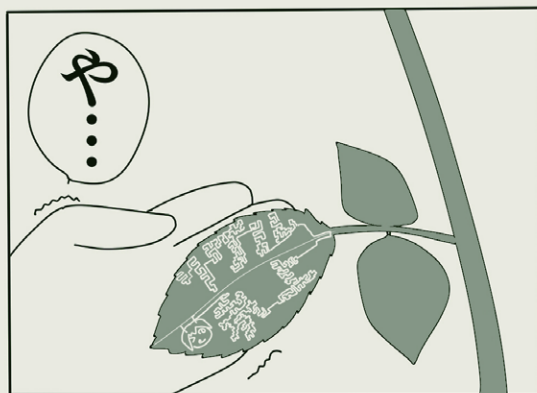
……頼もしいなぁ

続くかもしれない

アンテナ=昆虫の触角

リグルの 過冷なる 挑戦

驚きの白さ！

描いた人：猫屋敷

Jet
Set
Wriggle
ドドドドド
蟲にスプレーでやられる
気分はどおだああぁあぁ
あー…
バシー
バシー
爆発
しちゃった
主にストレスが
や…
やられた…
VS　エカキムシ
ハモグリガやハモグリバエの幼虫は葉肉を蛇行しながら
食べ進むため葉に絵を描いたような白い跡を残す。
残念ながら彼らの芸術は人間にとっては不都合な事が多い。

リグルの運命やいかに

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

カッコ可愛いリグルきゅん
完熟　*p2*

初めましての参加になります！よろしくお願いします。
リグルきゅん可愛く描けない…デス><

東方茶湾虫
クロツク　*6p～7p*

描き終えて気づいたのですがぼくのリグルほとんど後頭部か見切れてる…。

リグル紅魔を行く2
preudenano　*8p～9p*

霊夢：「最近咲夜が足元をよく気にしているけど、あれって絶対小銭が落ちてないかチェックしてるんだわ、なんて卑しいのかしら！」

リグルとチルノ
ぼこ　*10p*

いつもよりリグルがまるこいですね・・・・
改めましてよろしくお願いします。

ほたりぐる～ニコマ～
怒羅悪　*11p*

こんばんわ、どらおです。２コマなのに意味はありません、
ちなみにモ◯ハンはやったことはありませんw
では失礼しました。

お子さまりさとリグル
イリイチ　*12p*

ちいさな魔理沙とリグル。今日もなかよし。

おばけにゃ学校も試験もなんにもない
羅外　*13p*

今回のマンガは、こみトレで配布したコピー本に収録したものだったり。

きらきらリグル
残虐非道の貴公子　*33p*

電子基盤用の板(パソコンのメモリーとかの緑の板)を使って、製作しました。
板にマジックで絵を描き、描いた所以外の銅を溶かして後でマジックをふき取る手法です。私の画力の都合上しょぼいことになってますが、一発描きが得意な方が描けばキラキラしてきれいなものになります。
ネガポジ反転→http://www.nicovideo.jp/watch/nm9666890

『Insect Muse』
斑　*34p～35p*

アートと言ったら裸婦ですね。他に何があるというのですか。
いや、最初はミュシャ風に挑戦しようと思ってたのですが。
静まれ俺の右手……ッ
それはそれとしてムカデ君は当然レイヤー分けしてます。

無題
草加あおい　*36p～37p*

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…またもやこーりんにこんなことをさせてしまった自分が怖いです。　紅楼夢ｋ－１７ｂに「七輪大社」で参加しています。　リグルさんも出るマンガも掲載予定なので、イベント参加なさる方は冷やかしにでもいらしてくださいませ

レミリア探偵局
キッカ　*38p～40p*

アートと言えば博物館、そして色々パロ。続くかもしれません。
リグルの出番が少なくて辛かった。

リグルの過冷なる挑戦
猫屋敷　*41p～42p*

虫達のデザインはそれそのものがアートだったり。アクセサリーのモチーフにもなれば、羽をむしられて厨子の装飾にされたり…ってひぇぇ。
JSRは一度触っただけですがかなり楽しい作品ですよね。
GはGraphityのG。Gジェットじゃないよ！

表紙
小崎

会社のトイレに入ったらハトがいました。しかも今日で3度目。
どうも中ボスくさい。

NEXT▶ 次号11月号は10月22日(金)発行予定！

※次号の投稿締切は10月15日(金)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG　2010年10月号

2010年9月23日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

完熟
Salka
くろと
悠奈
残虐非道の貴公子
草加あおい
羅外
貴キ
草葉
蛍光流動
斑
preludenano
キッカ
猫屋敷
イリイチ
クロツク
ぼこ
怒羅悪
羅外
小崎